

京都外国語短期大学 2020 年度卒業生対象 卒業時アンケート集計結果

2021/05/31

総合企画室 IR グループ

1. 調査の概要

- 調査対象
2020 年度の卒業生全員（9 月卒業は除く）

- 調査期間と方法
2021.3.3～2021.3.31 の期間にて WEB 方式（メール配信及び QR コード記載の案内文配付）により調査を実施

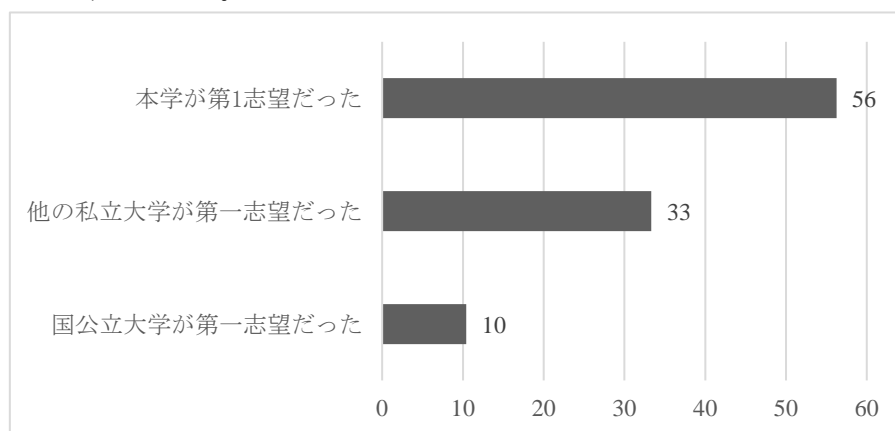
- 主な調査項目
 - 入学時の志望順位
 - 学修や大学生活等への満足度
 - 大学に入学したことに対する満足度など
 - 大学生活における成長の実感
 - 成長のきっかけ
 - 大学生活で身についた能力
 - 外国語の修得
 - 設備・環境の充実度
 - 建学の精神の理解
 - 卒業後の進路について

- 回収状況
昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年卒業式の際に実施していた質問紙調査形式を Web 調査に変更した。その結果、回収率が 6.7% と大幅に減少していたが、本年度は 37.8% と、一定数の回収ができたため、分析・考察に耐えられると判断した。

	対象者数	回答者数	回答率
短期大学	127	48	37.8%

2. 入学時の本学の志望順位

入学時に京都外国語短期大学が第一志望だったかどうかをたずねた。約 56%の学生が、本学を第一志望として入学している。



【図表 1】 入学時の志望順位（横軸の数値の単位は%：以下同様）

2. 本学に入学したことに對する満足度など

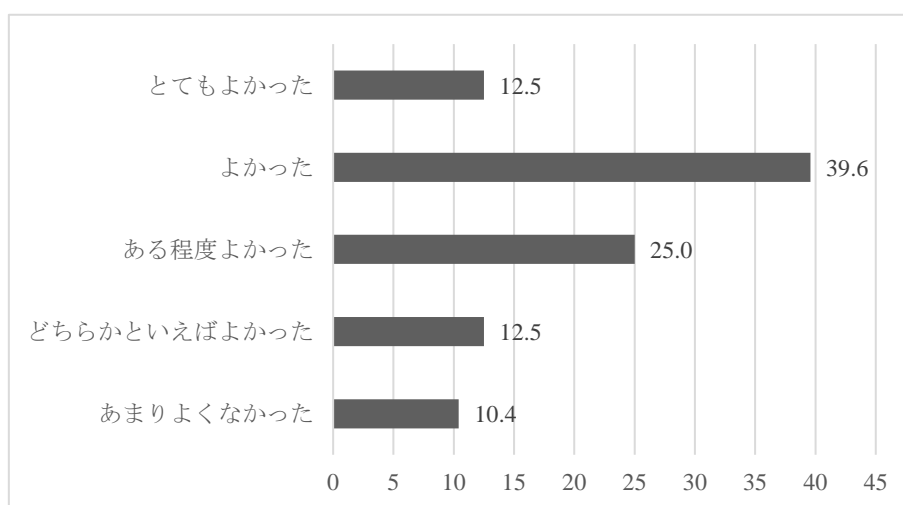
本学に入学して「よかった」と思えたかどうかや「満足度」をたずねた質問である。

京都外国語短期大学に入学してよかったかどうかをたずねる質問では、「とてもよかった」「よかった」というポジティブな回答が 50%を超えていることがわかる。一昨年度と比して「よかった」「ある程度よかった」の割合が逆転し、「よかった」と答える学生が増えている。

ただし、「あまりよくなかった」という回答が一昨年度 (5%) より多かったことは留意しておく必要がある。

これは 2 年間という短い大学生活のうち、1 年間で新型コロナウイルス感染拡大の影響で満足のいく大学生活を送れなかったということの表れかもしれない。特に、短大は大学と比して学生生活を送る期間が短いため、1 年間の重みが大いと思われる。2 年間という短期間の満足度を高めるためには、大学とは異なる方策が必要と考えられる。

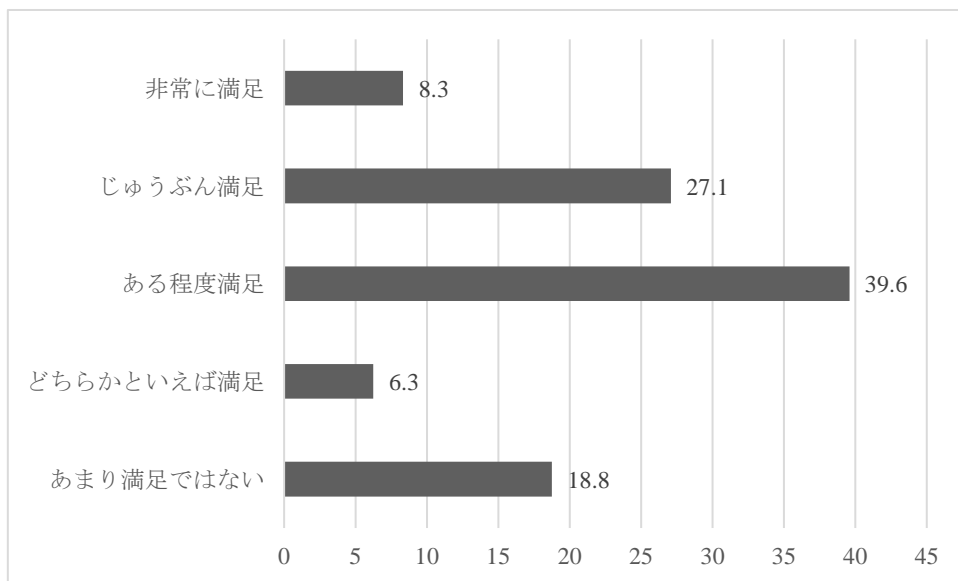
こうした新型コロナウイルス感染拡大の影響は、後述の教育・学修に対する満足度や大学生活全体に対する満足度にも表れているように見える。



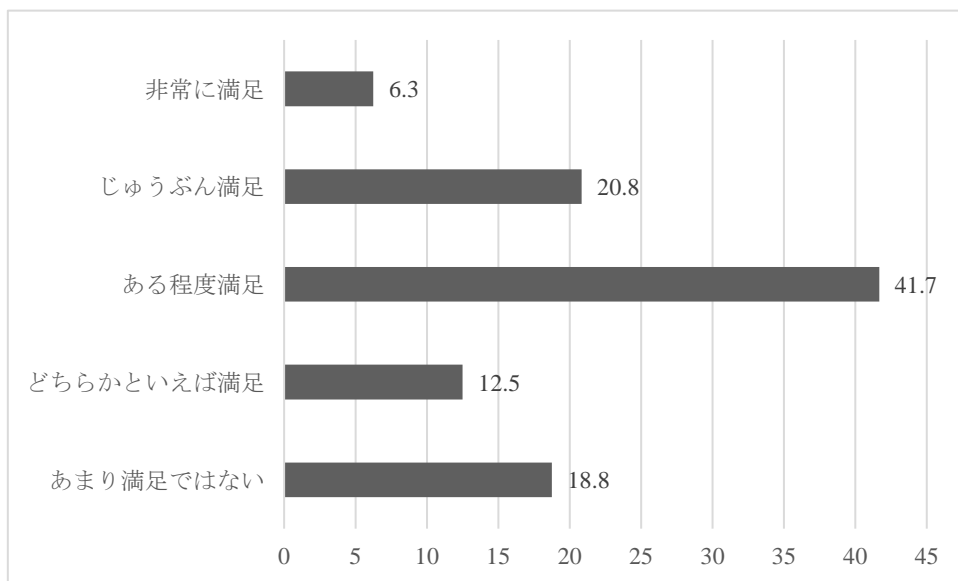
【図表 2】 本学に入学してよかったか

大学での教育や学修に対する満足度、および大学生生活全体に対する満足度をたずねた質問では、水準の差はみられるものの、「非常に満足」「じゅうぶん満足」という回答が全体の35%程度であり、「ある程度満足」という回答がもっとも多い。これも含めると、全体の75%が概ね満足しているようである。

課外も含めた大学生生活全体の満足感についても、ほぼ同様の傾向がみられ、「非常に満足」「じゅうぶん満足」という回答が全体の3割であり、「ある程度満足」も含めると、全体の7割程度が概ね満足しているようである。ただし、「あまり満足ではない」という回答が、いずれも18.8%と一定数あり、一昨年度（約7%）と比して多い。この点も、上述した新型コロナウイルス感染拡大による影響が考えられる。

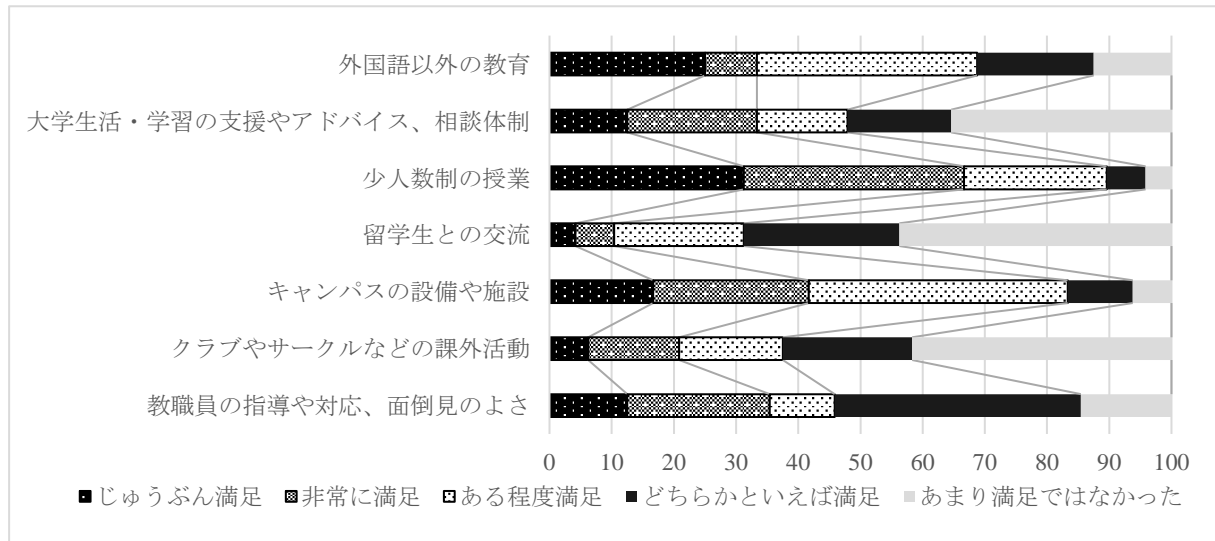


【図表 3】教育・学修に対する満足度



【図表 4】大学生生活全体に対する満足度

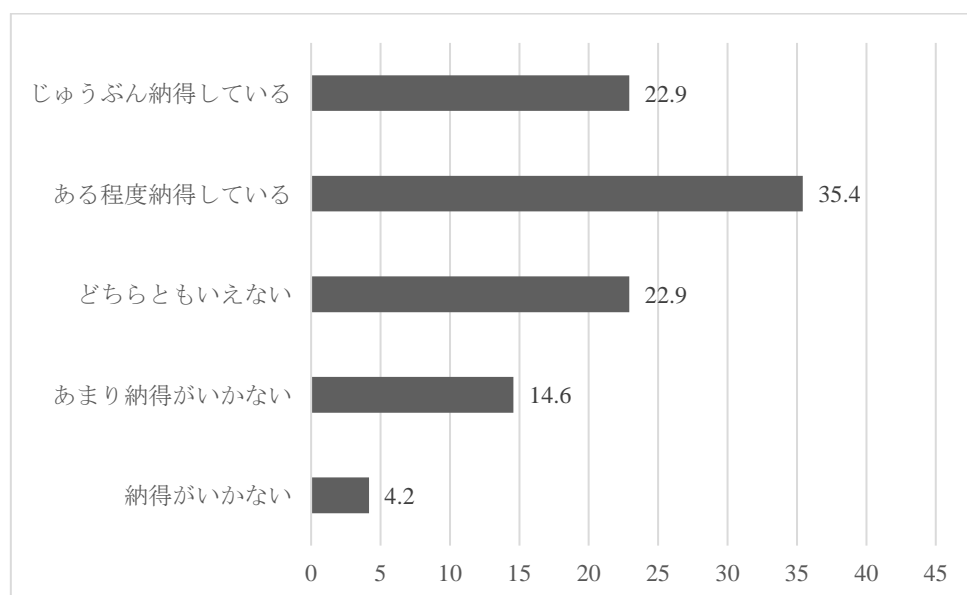
大学生活における満足度を個別の項目に分けて詳細にたずねると、項目によって満足度に違いがみられるようである。例年と同様に「少人数制の授業」の満足度は高いものの、2020年度は特に「大学生活・学習の支援やアドバイス、相談体制」「留学生との交流」や「クラブやサークルなどの課外活動」「教職員の指導や対応、面倒見のよさ」などの満足度が相対的に低いようである。前述のように、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、教職員や他の学生との交流に大幅な制限があったことの影響を受けている可能性がある。このような状況下においてもリモートなどの技術を利用しつつ、機会を確保できるよう、改善に向けた検討が必要である。



【図表 5】 大学生活の各項目に対する満足度

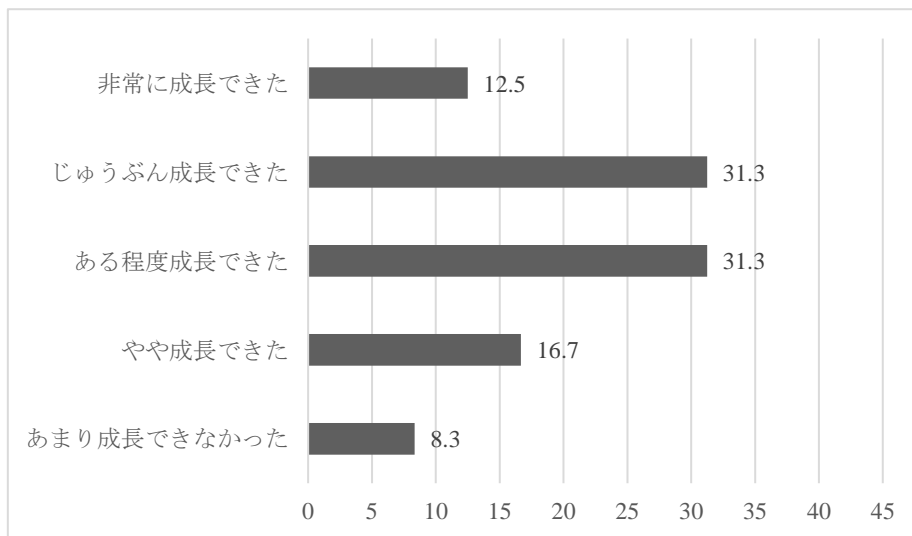
3. 大学生活における成長の実感

卒業後の進路やその決定プロセスに対する納得感をたずねると、一昨年度より「どちらともいえない」の選択が10%ほど減り、「じゅうぶん納得している」という回答が8%ほど増えた。同時に、「あまり納得がいかない」は6%ほど、「納得がいかない」は2%ほど増えており、回答が両極に偏る傾向がみられた。



【図表 6】 進路やその決定プロセスに対する納得度

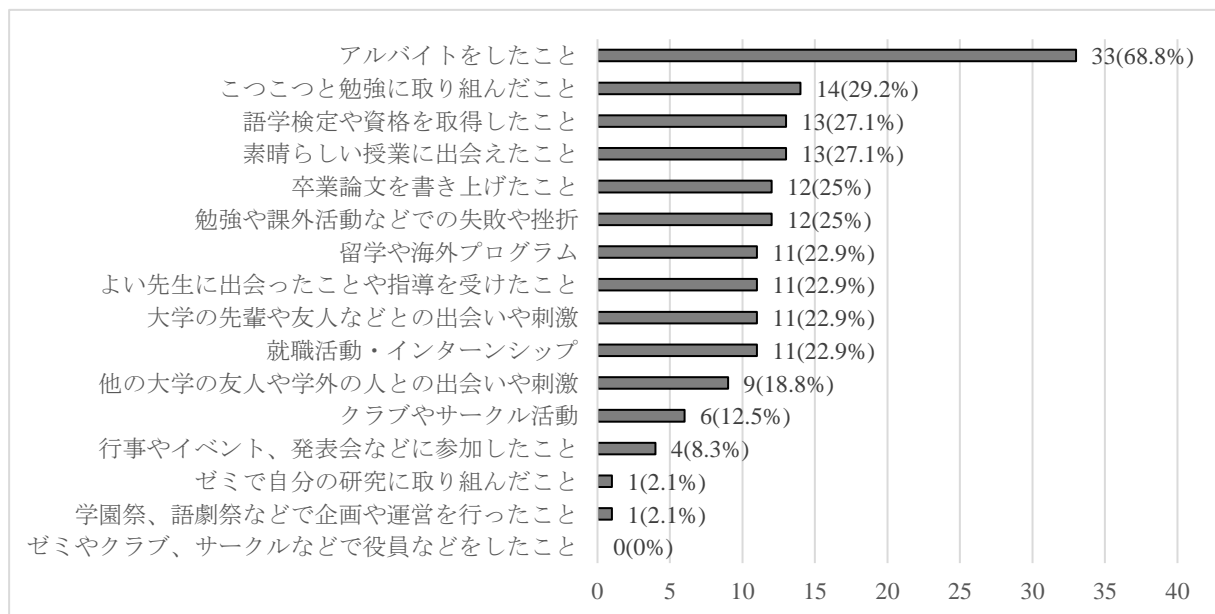
大学生活を通して自分がどのくらい成長できたかをたずねると、一昨年度に比して「ある程度成長できた」の選択が15%ほど減り、「やや成長できた」、「あまり成長できなかった」が5%ほど増えている。大学生活全体に対する満足度などと同様に、最後の1年間がコロナ禍にあったことで、成長を実感する機会が減じた可能性がある。



【図表 7】大学生活における成長実感

5. 成長のきっかけ

大学生活において成長のきっかけになった出来事をたずねたところ、最も多くの卒業生が言及するのは「アルバイト」であった。アルバイトは社会における実践的な経験であるため、成長を直接的に実感しやすいのだろう。こうした傾向は一昨年度と共通している。アルバイトに次いで言及が多いのが「こつこつと勉強に取り組んだこと」「語学検定や資格を取得したこと」などであった。語学検定や資格の取得は、目に見えやすい形をとるため、成長を実感するきっかけとなりやすいと考えられる。



【図表 8】成長のきっかけとなった出来事（横軸は回答数）

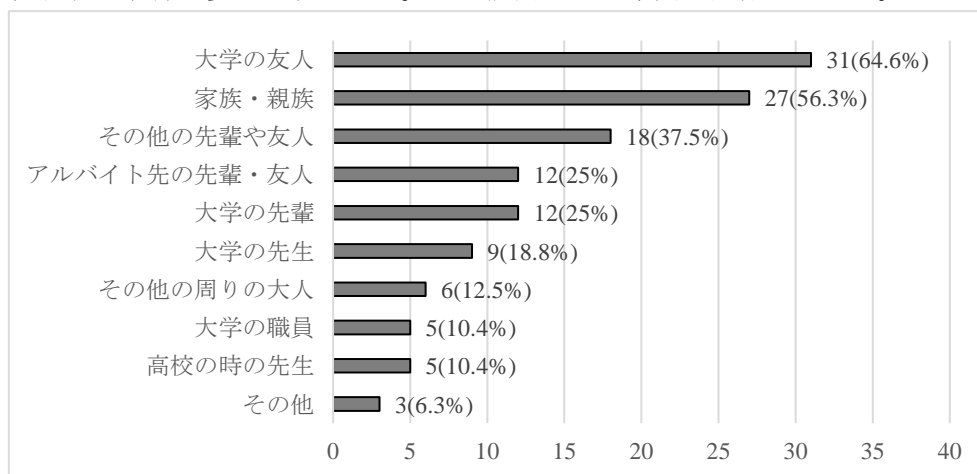
成長のきっかけとなった出来事と、これまでに集計した「大学生生活における成長実感」との関係重回帰分析によって検討した。大学生生活における成長実感を目的変数とし、成長のきっかけとなる出来事を説明変数としたモデルから、どのような契機が成長実感に影響するのかを分析した。今回のモデルは統計的に有意ではなかったが、参考までに分析結果をみると、「学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと」は成長実感に負の影響を与えていた。この理由は不明確だが、この経験を成長のきっかけとして報告した回答者数が少ないため、解釈は控える。一定の回答者数のあった「素晴らしい授業に出会えたこと」は、大学生生活での成長実感に正の影響を与えていたため、教員の努力は学生の成長の実感に一定の影響を及ぼすと思われる。

【図表 9】 学生の成長実感に対する成長契機の影響

出来事	偏回帰係数
学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと	-1.479 **
ゼミやクラブ、サークルなどで役員などをしたこと	0.000
行事やイベント、発表会などに参加したこと	0.218
他の大学の友人や学外の人との出会いや刺激	0.135
クラブやサークル活動	0.034
こつこつと勉強に取り組んだこと	0.532
ゼミで自分の研究に取り組んだこと	-0.545
素晴らしい授業に出会えたこと	1.084 *
勉強や課外活動などでの失敗や挫折	-0.185
語学検定や資格を取得したこと	0.057
就職活動・インターンシップ	-0.055
卒業論文を書き上げたこと	0.114
大学の先輩や友人などとの出会いや刺激	1.045
よい先生に出会ったことや指導を受けたこと	-0.260
留学や海外プログラム	-0.006
アルバイトをしたこと	-0.384

** $p < .01$ 、 * $p < .05$.

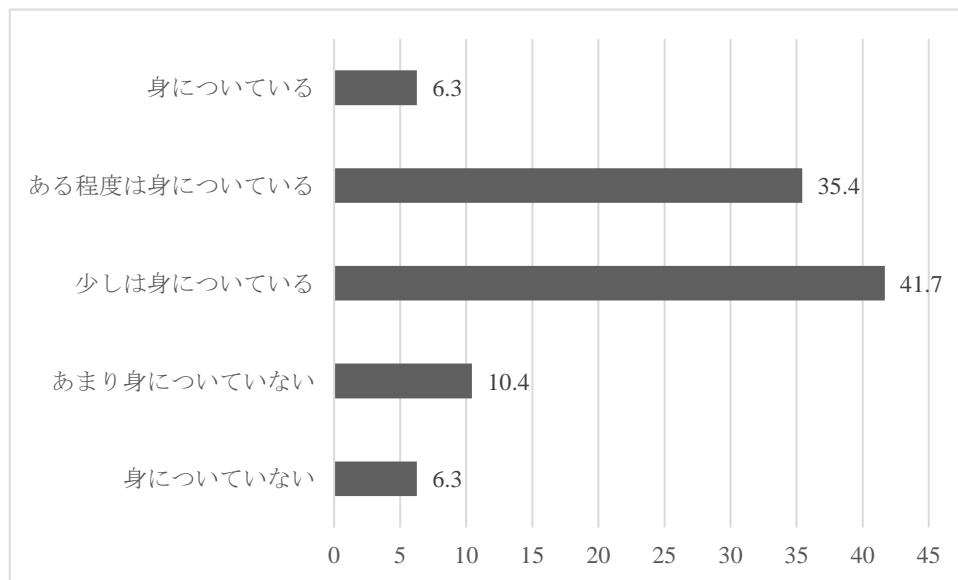
大学生生活において、悩みや困ったときに相談する相手をたずねると、学生は友人や家族など身近な人に相談するケースが多いようである。この傾向は一昨年度と同様であった。



【図表 10】 悩みや困ったときに相談した相手

6. 大学生活で身についた能力

卒業後に必要な能力が大学生活で身についたかをたずねると、中間の選択肢である「少しは身についている」という回答が最も多く、全体としては能力が身についたという回答が多い。この選択肢も含めると、全体の83%ほどが必要な能力が身についたと評価していることになるが、6%近くの卒業生は「身につけていない」と判断していた。自己評価は進路に対する不安とも関連すると思われるため、今後の検討が必要であろう。

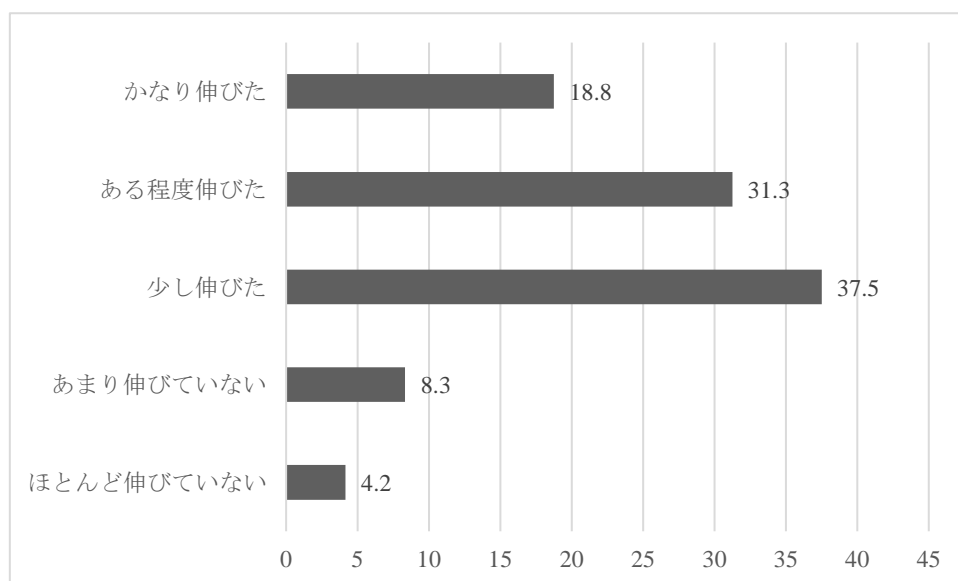


【図表 11】 卒業後に必要な能力が大学で身についたか（横軸は%：以下同様）

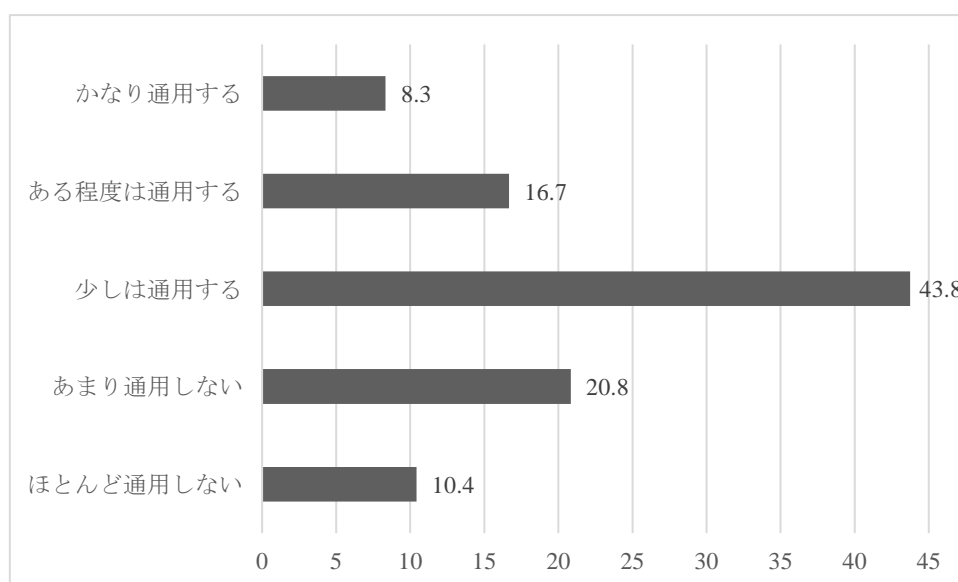
7. 外国語の修得

本学の教育の大きな柱である外国語の修得状況についてたずねた。全体としては「かなり伸びた」「ある程度伸びた」という回答を合わせて5割であり、「少し伸びた」まで含めると87.5%に上る。したがって、外国語については一定の水準で修得できているといえるだろう。

一方、現在の外国語の力が社会においてどの程度通用すると思うのかをたずねたところ、ある程度は通用すると考える学生は一定数いるものの、かなり通用すると思う学生は少数にとどまり、全体の1割に満たなかった。卒業生は外国語がある程度身についたと考えているものの、社会でじゅうぶん通用するほど修得できたと思えるほどの到達感は得られていないようである。



【図表 12】外国語の修得状況

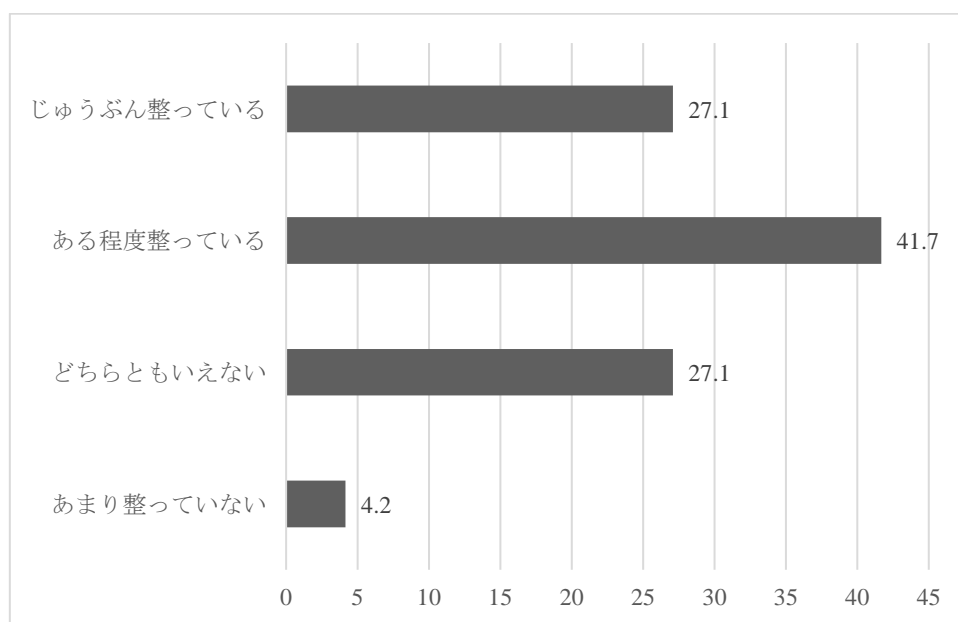


【図表 13】自分の外国語の力は社会で通用するか

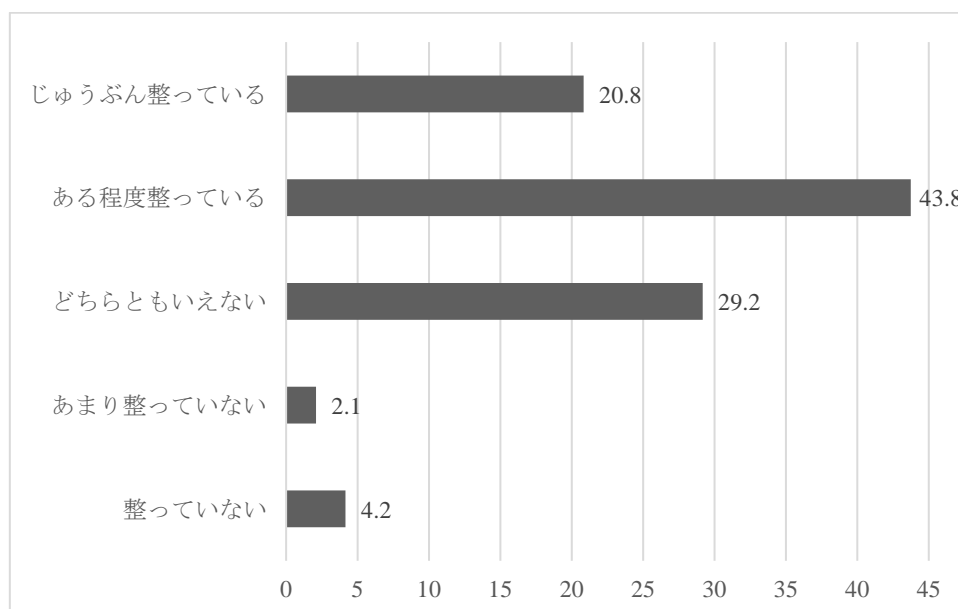
8. 設備・環境の充実度

大学の設備や環境、研究支援やアドバイスの体制が整っているかなどについてたずねた。コンピュータや無線 LAN、図書館、グループ・個人で活動する場所はいずれも「じゅうぶん整っている」「ある程度整っている」といった回答が 5 割以上程度を占めた。しかし、研究支援やアドバイスの体制について「じゅうぶん整っている」「ある程度整っている」という回答は 4 割程度であり、「どちらともいえない」という回答が 5 割に達した。

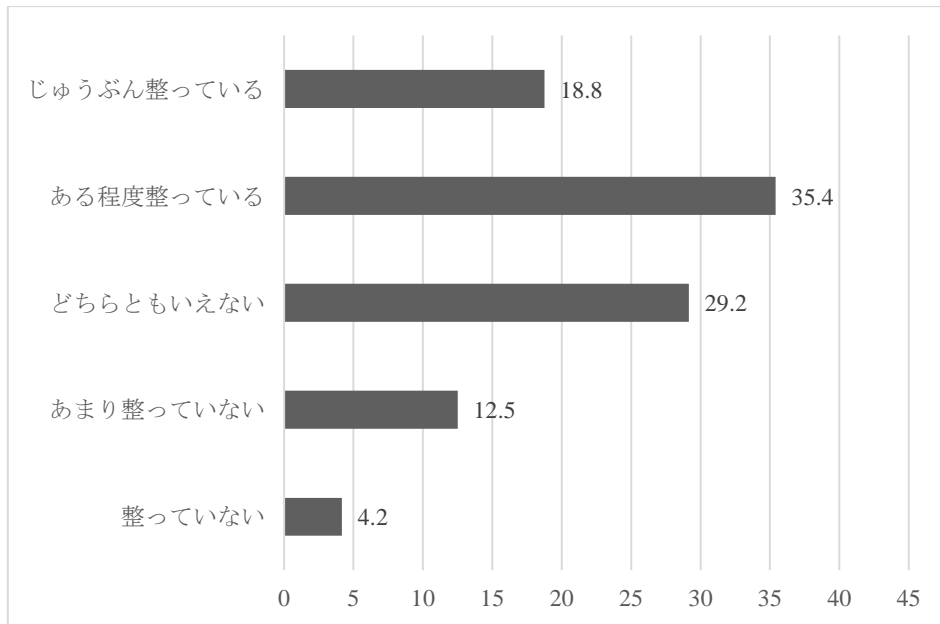
「あまり整っていない」「整っていない」という回答も 1 割ほどみられ、特に、グループ・個人で活動する場所についてはこれらの回答が 2 割近くになっており、今後の検討が必要と思われる。



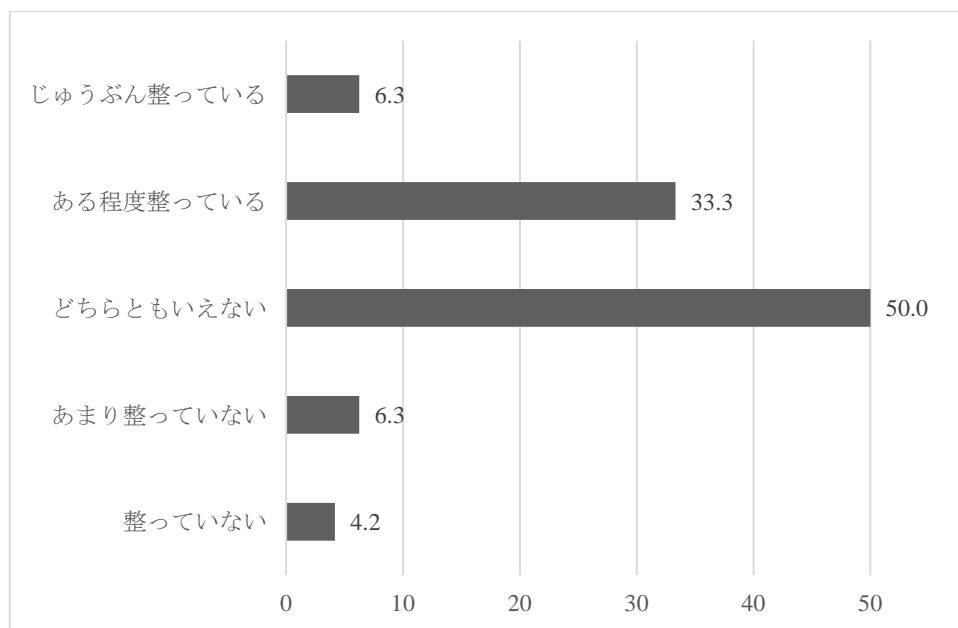
【図表 14】 コンピュータや無線 LAN など情報環境



【図表 15】 図書館



【図表 16】 グループや個人で活動する場所

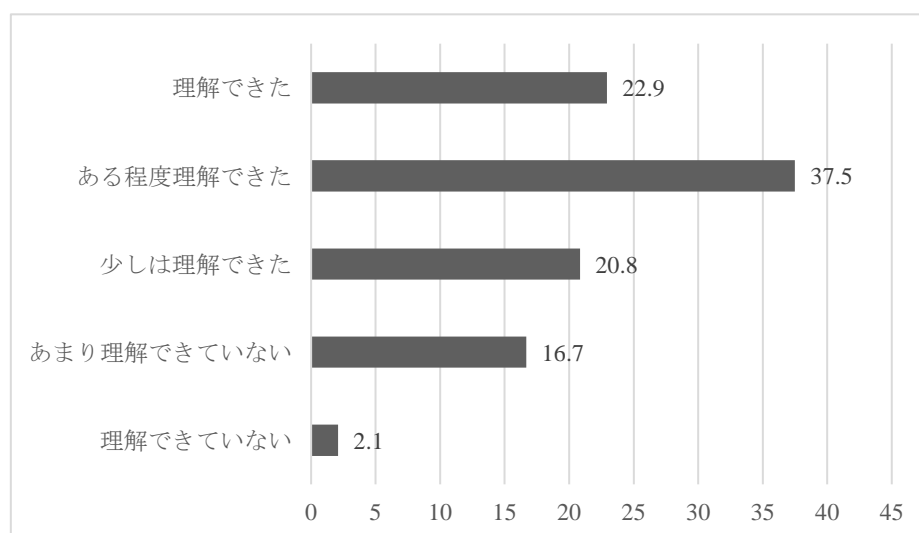


【図表 17】 調査・研究の支援やアドバイスの体制

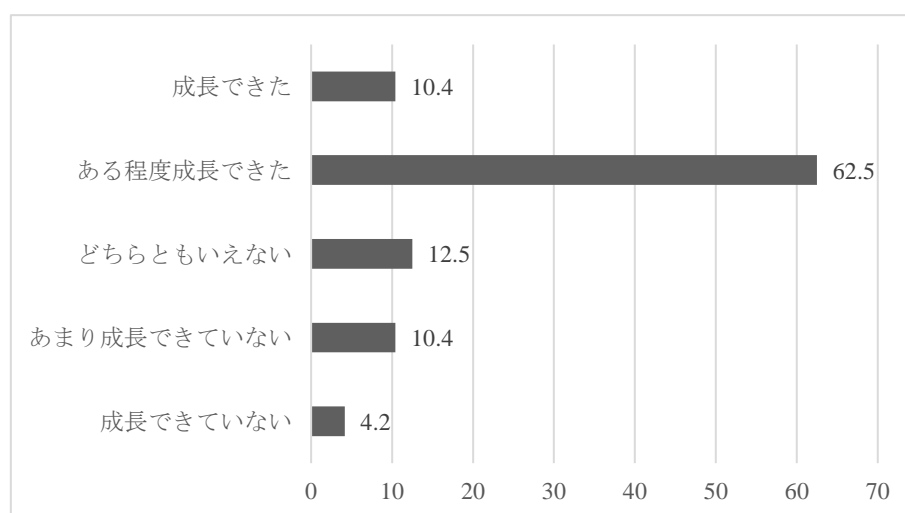
4. 建学の精神の理解

本学の教育理念に関して、大学教育を通して建学の精神が理解できたかどうかについてたずねた。建学の精神の理解については、多くの学生が理解できたと回答しており、一昨年度の調査時よりも「理解できた」「ある程度理解できた」と回答する学生の割合が増えている（「理解できた」は 8.9%、「ある程度理解できた」は 12.5%上昇）。特に、「ある程度理解できた」と「少しは理解できた」の割合が一昨年度と比して逆転しており、建学の精神について理解が深まっているといえる。これは大学でも同様の傾向がみられた。

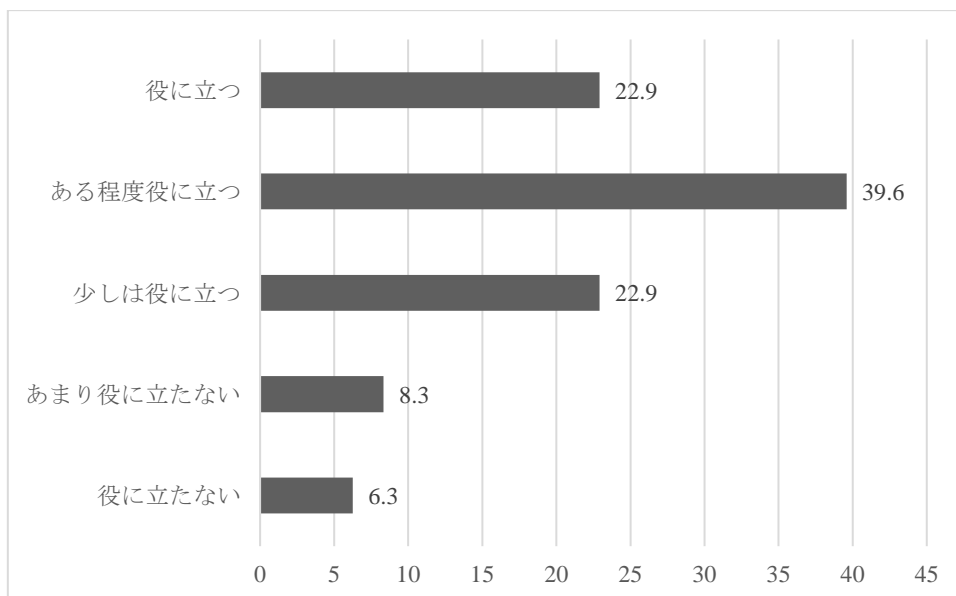
大学教育を通して社会に貢献できる人に成長できたかどうかについては、「成長できた」という回答は一昨年度と同程度の割合だったが、「ある程度成長できた」という回答が突出して多く、一昨年度に比して 28%ほど増加していた。また、大学生活での経験や身につけた知識・能力が、仕事や生活など今後の人生で役立つと思うかを尋ねたところ、「役に立つ」「ある程度役に立つ」という回答が 6 割程度であり、「少しは役に立つ」という回答も含めると 85%程度の卒業生が、大学で得た知識・能力が何らかの形で役に立つと実感できているようである。



【図表 18】 建学の精神の理解



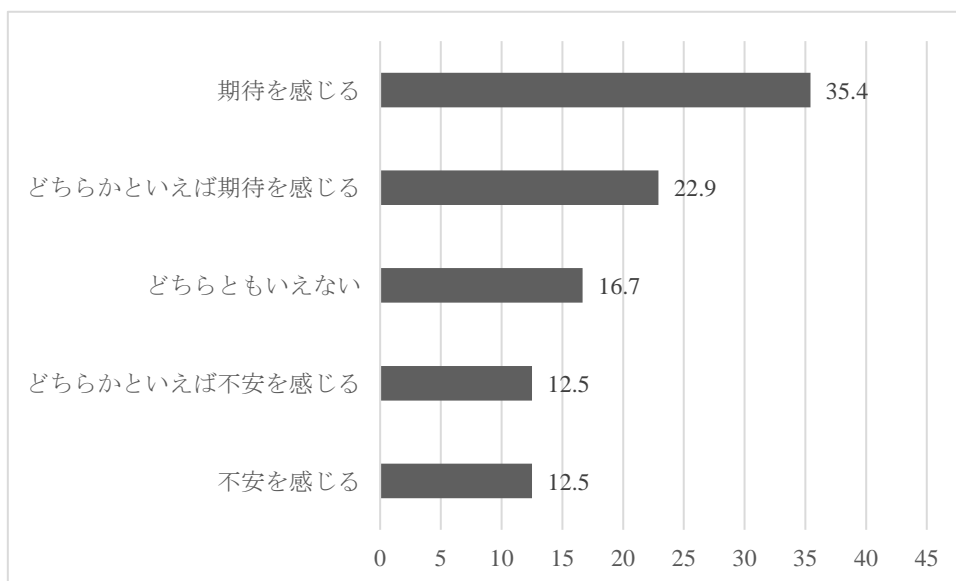
【図表 19】 大学教育を通して社会に貢献できる人に成長できたか



【図表 20】大学生生活での経験や身につけた知識・能力が、仕事や生活など今後の人生で役立つか

10. 卒業後の進路について

卒業後の進路に対する期待・不安についてたずねた。「期待を感じる」「どちらかといえば期待を感じる」という回答が全体の58%程度であり、一昨年度と比して上昇していた。特に、「期待を感じる」という回答は一昨年度より20%ほど増加している。「どちらかといえば不安を感じる」「不安を感じる」という回答は25%割程度であり、一昨年度より5%減少している。卒業して新しい進路に踏み出すにあたって、多くの学生は前向きにとらえていることがうかがえるが、不安を感じている学生も一定数は存在することから、こうした学生の不安の状況を調査し、適切に対応していく必要があるだろう。



【図表 21】卒業後の進路に対する期待や不安